

小学校 社会

社会的事象を多面的・多角的にとらえる子どもの育成
ー工業生産を支える貿易の学習において資料活用能力を高める指導の工夫を通してー

大間町立大間小学校 教諭 菊池 隆一

要 旨

第5学年「工業生産を支える貿易」の学習において、社会的事象を多面的・多角的にとらえる子どもを育成するために、資料を読み取る手掛かりを与え、資料から分かる事実や事象間の関連等に関係図にまとめるさせることを手だてとして授業実践を行った。子どもは、資料から事実を正確に読み取る力を高めるとともに、様々な事象の結び付きを構造的にとらえるなど、資料活用能力を高め、社会的事象を多面的・多角的にとらえることができるようになった。

キーワード：小学校 社会 多面的・多角的 資料活用能力 貿易

I 主題設定の理由

知識基盤社会化，グローバル化と言われる現代の社会状況，また，OECDのPISA調査における我が国の児童生徒の課題等を踏まえて，平成20年3月に小学校学習指導要領が告示された。社会科，地理歴史科，公民科の改善の基本方針としては「社会的事象に関心をもって多面的・多角的に考察し，公正に判断する能力と態度を養い，社会的な見方や考え方を成長させること」「地図や統計など各種の資料から必要な情報を集めて読み取ること，社会的事象の意味，意義を解釈すること，事象の特色や事象間の関連を説明すること，自分の考えを論述すること」を一層重視する方向で改善を図ること等が挙げられている。つまり，社会的事象を多面的・多角的に考察したり，社会的事象の意味を考えたりする力が一層求められているのである。また，その基になる力として，資料活用能力の育成も求められていると読み取ることができる。

これまでの自分の実践から子どもの実態を考えてみても，社会的事象を一面的にしか見ていなかったり，複数の資料を比較・関連付け・総合して読み取ることが苦手としていたりする様子が見られる。

本研究では，題材として工業生産を支える貿易を扱うこととした。ここでの学習では，直接的に外国とのかかわりを考えるために，統計などの各種資料を読み取る力が求められる。したがって，社会的事象を多面的・多角的に考察したり，資料活用能力を高めたりするのに有効な単元であると考えた。その中で，教師が資料を読み取る手掛かりを与え，視点を明確にして事実を正確に読み取らせたり，資料から分かる事実やそれを基にした推論，事象間の関連等を図に示させたりすることで，資料活用能力を高め，社会的事象を多面的・多角的にとらえる子どもを育成することができるのではないだろうか。

以上のことから，本研究主題を設定し，その有効性を実践を通して明らかにすることにした。

II 研究目標

工業生産を支える貿易の学習において，資料を読み取る手掛かりを与え，視点を明確にして事実を正しく読み取らせたり，資料から分かる事実やそれを基にした推論，事象間の関連等を図に示させたりすることにより，社会的事象を多面的・多角的にとらえる子どもを育成できることを実践を通して明らかにする。

III 研究仮説

工業生産を支える貿易の学習において，次のような手だてをとることによって，社会的事象を多面的・多角的にとらえることができるであろう。

- 資料を読み取る手掛かりを与え，視点を明確にすることで事実を正しく読み取らせる。
- 資料から分かる事実やそれを基にした推論，事象間の関連等を図に示させる。

IV 研究の実際

1 研究主題の考え方

(1) 多面的・多角的にとらえるとは

多面的にとらえることについて、小学校学習指導要領解説社会編（平成20年8月）には「社会的事象を比較・関連付け・総合して見たり考えたり、社会的事象を空間的、時間的に理解したり、公正に判断したり多面的にとらえたりできるようにすることが大切である」とある。中学校学習指導要領解説社会編（平成20年9月）では「『多面的』とは学習対象としている社会的事象が様々な面をもっていることを」また「『多角的』とはそうした社会的事象を様々な角度から考察し理解することを」意味する、としている。

一方、社会科において、社会的事象を多面的・多角的にとらえるということやその必要性については、様々な先行研究が行われている。

これらを基に、本研究では、多面的・多角的にとらえることについて以下のように考えることとする。

- ・社会的事象の様々な側面を比較したり、関連付けたりして調べ、その特色を理解すること。
- ・社会的事象を様々な角度から考察し、理解すること。

(2) 資料活用能力を高めるとは

資料活用能力について、小学校学習指導要領解説社会編（平成20年8月）に示されていることを基に、本研究では、資料活用能力が高まるとは以下のように考えることとする。

- ・資料などから速く正確に自分が必要とする情報を読み取る。
- ・資料の内容についての全体的な傾向を正しくとらえる。
- ・複数の資料を関連付けて読み取り、二つ以上の事象同士の関連をとらえる。
- ・自分が必要としている資料かどうかを正しく判断し、選択して収集する。
- ・資料から得た情報の関連付けを意識して整理したり再構成したりする。

2 研究仮説の考え方

(1) 資料を読み取る手掛かりとは

「学習ハンドブック」（小西英生，2009）を参考に、単元の初めに各種資料を読み取る時のポイントとなる観点をまとめた「なるほどポイントメモ」（図1）を子ども一人一人に配付する。

(2) 視点を明確にするとは

「なるほどポイントメモ」を活用させ、見るべき視点を確認しながら資料を読み取らせる。これにより、子どもが調べる視点をはっきりと意識し、見通しをもって調べ活動を行うことができるようになる。また、資料から分かる事実を正しく読み取ることができるものとする。

(3) 資料から分かる事実やそれを基にした推論、事象間の関連等を図に示させるとは

「関連図」（長岡誠，2005）や、「ウェビング」（澁谷隆行，2008）の先行研究を参考に、日本の貿易の様子について、調べて分かった事実やまとめて言えることなどを関係図にまとめる活動を行う。これにより、日本の貿易について構造的にとらえることができ、その結果、社会的事象に様々な側面があることをとらえたり、様々な視点から社会的事象をとらえたりするようになるものとする。

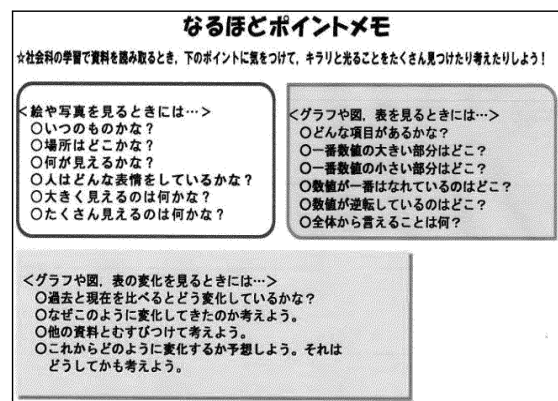


図1 なるほどポイントメモ

3 小単元の指導計画

(1) 小単元名「世界とつながる自動車」

(2) 指導計画（全5時間）

時	学 習 の ね ら い
1	・自動車が海外へ輸出されていることを知り、日本の貿易について調べる意欲をもつ。
2	・日本の貿易や運輸の様子について、グラフや分布図を用いて調べることができる。
3	・日本の貿易や運輸の様子について、調べたことを発表し合うことで、日本の貿易や運輸の特色について考えることができる。
4	・日本の貿易や運輸について関係図にまとめることで、日本の貿易や運輸の特色について構造的に理解することができる。
5	・日本の貿易の課題について知り、これからの貿易の在り方について考えることができる。

4 授業の実際

(1) 資料を読み取る手掛かりを与え、視点を明確にして事実を正確に読み取らせる場面（第1時～第3時）

ア 第1時

小単元の導入として写真資料から分かることを記述させた。その後「なるほどポイントメモ」を活用し、再度資料を読み取らせた。最初の読み取りの内容と区別できるように、ノートに線を引いて仕切らせた（図2）。

子どもたちは「なるほどポイントメモ」を手掛かりに、輸出台数の多い相手先や少ない相手先についてすぐに着目し発表していた。日本との距離についても気付き、発表する子どももいた。

授業後に「なるほどポイントメモ」を使った感想を聞いたところ「気を付けて見るところが分かりやすかった」「たくさん見付けられた」と話す子どもが多かった。ノートからは、「なるほどポイントメモ」を使うことで、ほとんどの子どもが資料のどの部分に着目すればよいかを理解し、これまでよりも多くの事実を書き込んでいたことがつかめた。

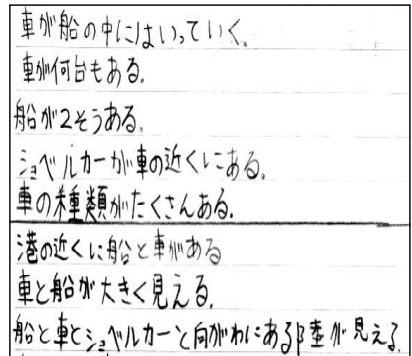


図2 ノート例

イ 第2時

第2時は、まず、日本の貿易について調べる計画を立てた。調べる観点を輸出入品目、貿易相手先、輸送手段の三つに焦点化し、自分の調べたい内容を選ばせた。そして、「なるほどポイントメモ」を活用して調べさせた。第1時と比較すると、読み取る資料の種類は異なるものの、資料から分かる事実を速く、そして数多く見付けることができていた（図3～図5）。

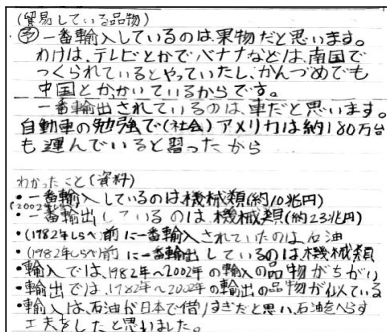


図3 輸出入品目について調べた子どものノート例

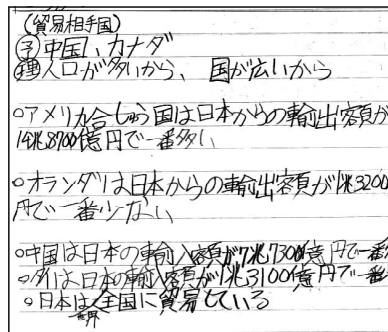


図4 貿易相手先について調べた子どものノート例

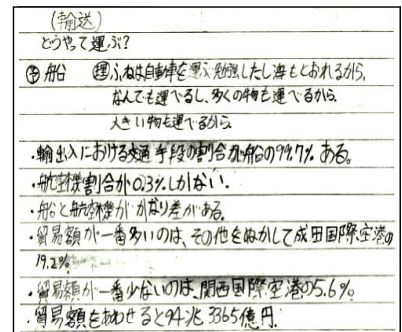


図5 輸送手段について調べた子どものノート例

ウ 第3時

第3時では、第2時に調べた内容について話し合い、深めていった。

輸出入品目については、資料の絵を手掛かりにして、原料や材料に分類されるものに着目させた。また、多く輸出されている品目は生活にすぐに使えるものや加工したものであるのかどうかについて考えさせた。これにより、日本は輸入した原料や材料を加工して、価格の高い工業製品を輸出しているという、日本の貿易の特色を理解させていった。子どもAは、一番多い輸出品は機械類であるという事実を正確に読み取っていることが分かる。

貿易相手先については、輸出入額の上位国や日本との距離から見た貿易相手先の分布に目を向けさせることで日本がアメリカ合衆国や中国、距離的に近いアジアの国々とも盛んに貿易をしていることに気付かせるようにした。子どもBは、貿易相手先の分布図の輸入額に着目し日本最大の輸入相手国が中国であるという事実を読み取ることができた。

輸出入品目について調べた子どもA

A: 私は、一番輸出されているのは車だと予想しました。理由は、前の時間の学習で車の輸出台数を表した図を見たときに、アメリカ合衆国に多く車が輸出されていたからです。分かったことは、2002年の輸出品で一番多かったのは、機械類でした。だから、車はあまり輸出されていないと思いました。

T: あまり輸出されていないということですか。

A: 機械類よりは少ないということです。

貿易相手先について調べた子どもB

B: 私は、一番日本が輸入している国はアメリカ合衆国だと予想しました。理由は、日本はアメリカにたくさん輸出しているから、輸入もたくさんしているのではないかと思ったからです。実際に調べたら、日本が一番輸入している国は中華人民共和国でした。私は、自分の予想と違っていたので、意外だなあと感じました。

輸送手段に関しては、子どもCのように、多くの子どもが、船や航空機であると予想していた。ただ貿易量から見ると、輸送手段の割合のほとんどが船なのにもかかわらず港別に見た貿易額の第1位が成田国際空港であるということに疑問をもち、その理由について、より深い思考をすることができた。

輸送手段について調べた子どもC

C：ぼくは、船や航空機を使って貿易していると予想しました。資料を見てみたら、やっぱり船と航空機を使って輸送していることが分かりました。

(2) 事象間の関連等を図に示させ、多面的・多角的にとらえさせる場面（第4時）

第4時では、前時まで学習した日本の貿易の様子を関係図にまとめる活動を行った。サンプルとなる型を教師が示した上でまとめさせた。

関係図を作った後、数名の子どもに全体で発表させた。すべての発表が終わってから、日本の貿易について関係図に表して分かったことや感じたことを話し合った。その話し合いの中では子どもから「図にするとどうつながっているのかがはっきりするので分かりやすい」「一つの事実が必ず日本の貿易とつながっていることが図から分かった」などの発表があった。

これらの発言から、関係図にまとめることで、多くの子どもが日本の貿易について多面的にとらえることができていることが見て取れる。

子どものまとめた関係図について、項目のつながり方を図6の①～③のように分類し考察を行った。②及び③の型は、一つの事実を複数の事実（又は見方）に関連させている。つまり、一つの事実を様々な側面からとらえている、多面的な見方をしているととらえることができると考える。

図7は、子どもがまとめた関係図である。これを見ると、単線型は少ない。例えば輸入品目について、原油やボーキサイト、鉄鉱石という品目と、資源のほとんどを輸入しているという見方が複線で結ばれている。その他の部分も、観点ごとの具体的な事実から事実や見方を複線でつなぎ最終的に日本の貿易につなげている。つまり、日本の貿易に関して、多面的にとらえることができていると考察した。

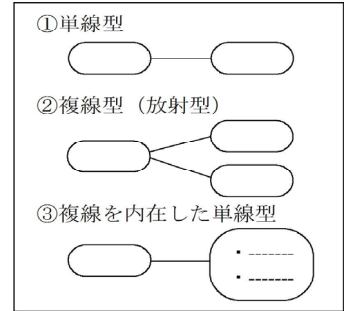


図6 関係図のとりえ方

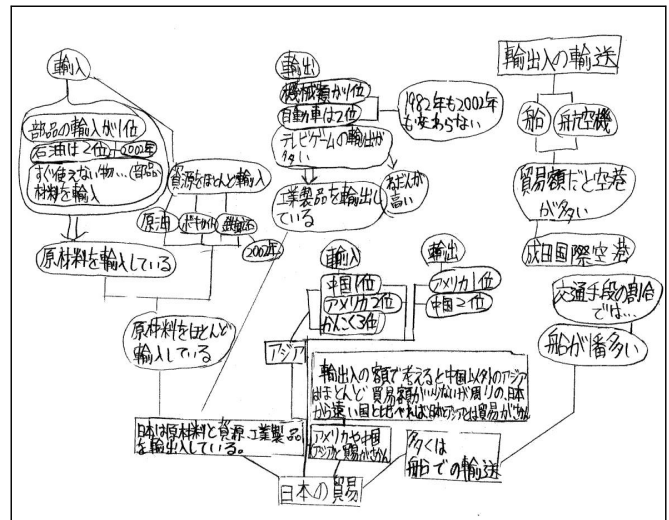


図7 子どもがまとめた関係図

5 単元終了後の検証

(1) 資料活用に対する子どもの意識の変容

図8は、資料活用に対する子どもの意識調査の結果である。

それぞれの質問に対し、肯定的にとらえた子どもの人数について、単元前と単元後で比較した。すると五つの質問項目すべてにおいて肯定的にとらえる子どもが増える結果となった。これは、本単元で「なるほどポイントメモ」を用いて、視点を明確にして資料を正しく読み取ったり、事象間の関連等を図に示したりすることを通して社会的事象を多面的・多角的にとらえようとする意識が高まったものと考察した。

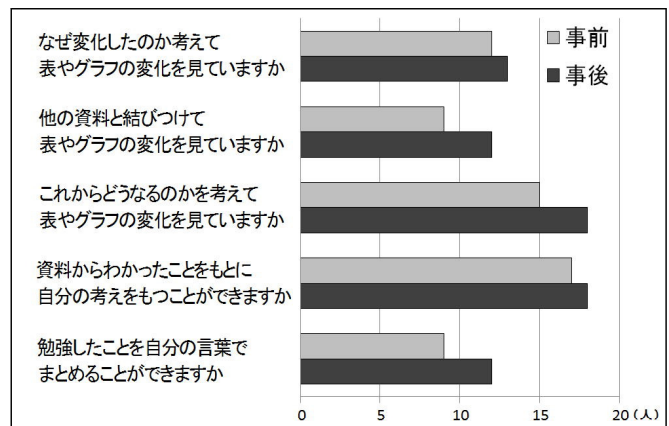


図8 資料活用に対する子どもの意識の変容

(2) 資料を読み取る力に関する子どもの変容

単元の前後に全く同じ資料で読み取りについてのテストを行った。設問1は統計資料から分かること、設問2は分布図から分かること、設問3は二つの資料の関連付けて分かることを箇条書で記述させた。記述数の比較とその内容の分析によって、子どもの資料活用能力がどのように変容したのかを検証した。

ア 記述内容の量的な変容

図9は学級全体の設問ごとの記述数を比較したものである。どの設問でも、事後テストの方が記述数が多くなった。本単元の学習を通して、調べる視点を明確にさせることで、同じ資料から、より多くの事実を見付け、書き込むことができるようになったと考えられる。設問3は、二つの資料を関連付けて考えることを問う内容であったが、記述数が増えていることから、二つの資料の関係をとらえて考えることができる子どもが増えていると言える。

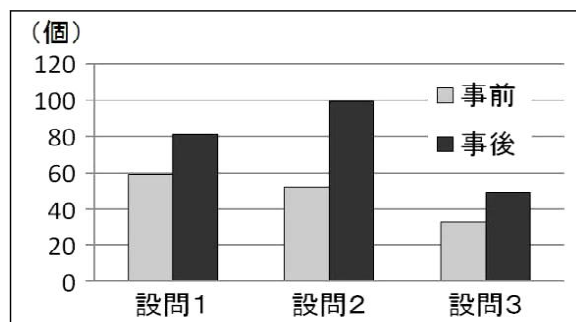


図9 設問ごとの記述数全体の変容

イ 記述内容の質的な変容

設問1と設問2に対する子どもの解答について、記述の内容を、表1のように分類し、事前と事後で比較した。学級全体の様子は表2である。一つの文に複数の要素が含まれているものは、内容ごとに要素の数を数えた。

表1 記述内容の分類

↑	5 総合的な記述
上	4 関連付けを行った記述
位	3 比較した記述
概	2 広がりやちらばりをとらえる記述
念	1 個別の事実の記述

設問1と設問2に関する記述内容の質を比較すると、どちらにも関連付けを行った記述はなかったものの、全体として記述数が増えている。記述の内容に目を向けると、事後テストでは、「個別の事実の記述」だけでなく「広がりやちらばりをとらえる記述」や「比較した記述」といった、より上位概念と考えられる記述が増えていることが分かる。

表2 設問1と設問2の記述内容の質的な変容

以上のことから、資料から分かる事実について個別に読み取るだけでなく、広がりやちらばりといった、より広い視野でとらえる見方ができるようになったこと、読み取った事実同士を比較して、特色などをとらえる見方ができるようになってきたことが言える。また、題意をしっかりととらえていない誤答も事後テストではなくなった。

■設問1							
	個別	広がりやちらばり	比較	関連付け	総合	誤答	合計
事前	44	15	3	0	0	1	63
事後	51	23	7	0	0	0	81
■設問2							
	個別	広がりやちらばり	比較	関連付け	総合	誤答	合計
事前	24	19	5	0	0	4	52
事後	53	44	9	0	2	0	108

※いずれも記述の中に該当する内容が何箇所あったかを数えたもの

次に設問3への記述内容を分析した。ここでは、3名の子どもを抽出し考察する。

子どもDは、事前テストでは、題意をとらえていない漠然とした記述をしているが事後テストでは、北海道における野菜の生産額と東京市場へのキャベツの出荷量を比較し、疑問を感じる記述ができています。

表3 設問3の記述内容の変容

子どもEは、事前テストでは、二つの資料から分かることをそれぞれ個別に見ようとしているが、事実を正確にとらえることはできていない。しかし、事後テストでは事実を正確に読み取るとともに、二つの資料を結び付け、総合的にとらえることができています。

子どもFは、事前テストで、二つの資料を結び付けて考えることができていない。しかし、事後テストでは、野菜の生産額の多い都道府県について、二つの資料を結び付けて記述しているとともに、東京市場との距離にも目をつけて、自分なりの考察ができています。

	事前	事後
子どもD	・生産するところが少ない。	・資料1で北海道は1000億円以上だけど、資料2では東京市場に入るキャベツは少ない。
子どもE	・生産額やキャベツの産地もだんだん減ってきている。	・おもに関東で多く生産している。
子どもF	・野菜の生産はだいたい400~700億円未満だ。 ・東京市場に入るキャベツは、月ごとに増えている。	・千葉や愛知は東京に近いし生産額も多いから東京市場にキャベツを入れているのではないだろうか。

V 研究のまとめ

単元を通して、資料を読み取るときに「なるほどポイントメモ」を活用させることにより、資料を読み取る際のポイントを子どもがすぐに理解し、一つの資料からより多くの事実を書き出すことができるようになった。また、資料のどこを見ればよいのかへの意識が高まることにより、事実を正確に読み取る力が高まった。このことは、事前テストと事後テストの結果を比較して、記述数が増えたことや、記述内容の質が高まったことから裏付けられる。これらのことから、資料を読み取る手掛かりを与え、視点を明確にすることが、子どもの資料活用能力を高めるために有効であったと言える。

また、既習事項や生活経験を基に予想を立てた上で調べて確かめる活動を行ったことにより、事実やその根拠を明らかにしようとする意識を高めることができた。

日本の貿易について関係図にまとめる場面では、日本の貿易の特色という一つの大きなテーマについて様々な事象が結び付いていることを構造的にとらえさせることができた。これらのことから、資料から分かる事実やそれを基にした推論、事象間の関連等を図に示させることが、社会的事象を多面的・多角的にとらえる子どもを育成することにつながると言える。

また、学習事項を関係図にまとめさせたことは、子どもの社会的事象に対する認識の深まりを見取る上でも有効であった。

VI 本研究における課題

日本の貿易について観点ごとに分けて調べる際、扱う資料の数に違いがあったこと、また、資料が複雑であったこと等により、ねらいに迫るために必要な事実を調べるのに時間がかかった。資料を与える際には、子どもの実態も考慮しながら、どのような内容をどのくらいの深さで読み取らせるのかを十分に考えることが必要である。

子どもにまとめさせた関係図の中に、調べた事実やまとめなどだけではなく、感じたことや疑問なども書き込めるようにすれば、さらに思考の広がりをもたせることができたのではないかと考える。

<引用文献>

- 文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説 社会編（平成20年8月）』, p.106
文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説 社会編（平成20年9月）』, p.17

<参考文献>

- 岩手県立総合教育センター 2000 『岩手県立総合教育センター教育研究』
澁谷隆行 2008 「社会的事象を多面的にとらえる力を高める社会科指導の工夫—関連付けて考える場を取り入れた指導を通して—」 『平成19年度研究紀要』 青森県総合学校教育センター
井上正子 2008 「社会的事象を多面的・多角的に追究することができる生徒を育てる社会科学習指導法の研究—概念図と関係図の活用の位置付けを通して—」 『平成19年度長期派遣研修員研究報告書』 福岡県教育センター
小西英生 2010 「社会科における思考力・表現力の育成をめざして—思考・表現活動を通して、多面的に考察する力をはぐくむ指導の実例—」 『平成21年度研究紀要』 京都市教育委員会 京都市総合教育センター
小西英生 2009 「社会科における、資料を読み取り、自分の考えをもつための指導の工夫—社会科学習ハンドブックを活用した実践事例—」 『平成20年度研究紀要』 京都市教育委員会 京都市総合学校教育センター

<参考URL>

- 長岡誠 2005 「調べたことから社会的事象の意味や働きについて考える力を育てる社会科指導の工夫—関連図をもとに話し合う交流活動を取り入れて—」 群馬県総合教育センター
<http://www2.gsn.ed.jp/houkoku/2004c/04c06/04c06h.pdf> (2011.1.25)